

2015 5/12

No.1994

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



「つつじ寺」として知られる川崎市宮前区神木本町の等覚院のツツジがここ数日の暖かさで一気に開花、見ごろを迎えたツツジが境内を鮮やかに染め、参拝者を楽しませた（4月23日撮影）。



contents

視点・点描	3
美の奉仕者と罪人たち	
経 済	4
水素社会は本当に来るのか 新手法によるシミュレーション	
社 会	6
“ハラルブーム”で混乱も 2.1兆ドル市場狙い競争激化	
企業最前線	8
視界良好の民間航空機市場 一斉に生産能力を増強	
くらし2015	10
家でできる災害の備え	
広告珍談	12
うまい物もろもろ⑬ 京都はうまいか!	
NNAアジア経済レポート	13
会員のページ	14
設立50周年は来年4月に(その11)視察旅行 会員の動き	
会員のページ	15
設立50周年は来年4月に(その11)視察旅行	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2015年5月13日(水)

13時30分～15時

ホテルキャメロットジャパン
5階「ジュビリー」

講師は共同通信社客員論説委員、
星槎大学客員教授の

佐々木 伸 氏

演題は「日本人がテロの標的に
世界を揺るがすイスラム
国の脅威」(仮題)

◇横浜定例講演会

2015年6月3日(水)

13時30分～15時

新横浜プリンスホテル 3階
「ファンタジア」

講師は日本個人情報管理協会
理事長の 中島 洋 氏

演題は「経営者がカギ握るマイ
ナンバーへの対応～厳格に
なるプライバシー管理とトッ
プの責任」(仮題)

視点 点描



美の奉仕者と罪人たち

あくまで私見だが、志賀直哉の簡潔、清廉な文体を好む人は三島由紀夫のような華美な装飾性に富んだ文章をあまり好まない傾向にあるようだ。いささか乱暴な分け方だが、周囲の文学ファンを見渡すと志賀派と三島派は結構、明確に分かれるように思う。

では、没後50年を迎えた谷崎潤一郎はというと、こうした文豪たちと少し離れた孤高の位置にある。

「刺青」^{しせい}「卍」^{まんじ}など性の深遠な世界

を描き、老齢となつては、妻と教え子に姦通を促し自らへの刺激剤とする「鍵」のような作品を生み出した。永井荷風は「誰一人手を下すことのできなかった芸術の一面」と語っている。

ひたすら美を追い求めようと欲すれば、自らも異界の住民となる必要があるらしい。谷崎は日々の暮らしも世俗と隔絶したものにしてよう

とした。自分に刺激を与え、芸術的感性を共有できる女性を求めて3回の結婚を繰り返した。1人目の妻千代との間には娘までもうけながら、親友佐藤春夫に譲るような「事件」まで引き起こした。女性崇拜で知られていたが、裏返せば、崇拜に値する女性のみを認める酷薄なところがあつたのではないか。

「悪魔主義」と呼ばれた文豪は、その行状まで世俗の倫理と無縁であつた。ところが：意外なことに素顔の谷崎は、娘のファッションにまで口うるさく小言をいう子煩悩な父親の一面があつたことが、死後半世紀たつて分かつたという。その証拠となる225通もの書簡が見つかり、一部が神奈川近代文学館で公開されている。千代との間に生まれた娘、鮎子宛ての手紙だ。鮎子の長男が公開を決意した。

驚くのは谷崎を語る重要な書簡がこれほど長い間、秘されてきたことだ。何せ、年頃の鮎子さんに「パーマントは毛が赤くなつて減るといふけど大丈夫なのか」なんて小うるさい内容の文章をよこしているのだから、悪魔の文豪たる面目丸つぶれ。まるで谷崎に捨てられた千代、鮎子の母子が、谷崎のイメージをかたくなに守り続けてきたようにも思える。実際に鮎子は、恨みもなく谷崎のよき理解者であり続けたというから不思議だ。

芸術に人生をささげたという谷崎だが、彼だけではない、家族や友人たちもまた美への奉仕者であつたのだ。そして谷崎もまた、そんな彼女たちに対する罪の意識を背負いながら世を去つたのではないか。今後の研究で、新たな谷崎像が浮かび上がるかもしれない。

(神奈川新聞文化部長 丸山 孝)

京都はうまいか!

日本料理が世界の文化遺産になつたとか、すばらしいことだ。

そういうえば親しい、アメリカ人もイタリヤ人もドイツ人も、みんな和食が好きだ。

日本料理といえば京都。1884

(明治17)年3月、この広告をだした大阪の料理屋は、京都名所を手玉にとつた料理でみごとである。

閑寺とつづいて

「第六番 祇園祭 ちまき寿司」とよい山提灯」

第七番は御所、第八番は高台寺、

第九番は八瀬とつづいて

「第十番 南禅寺 瓢亭 湯豆腐 名物玉子」

「第十一番 丸山 雪見 御肴」

「居ながら名所をしるとか、歌

人にあらねど料理人は居ながら知らず都名所、古跡名物に応じたを

御笑ひぐさにて御来車をねがう」

とつつましいこと。1人20銭、あ

こがれの京料理、なにわつ子は

すつとんで行つたかな。

料理屋の広告は、仮名垣魯文(横

浜の新聞記者で作家)にかぎると

人気コピーライター。1876(明

治9)年につくつた1例をどうぞ。

「新年の初旭と共に軒に翻翻国

旗の標柱、礎え長き御影を蒙り、

新規に開く割烹店は、手狭ながら

も一個の地球」「値価は決して高

都名所福引御料理

來廿六日より始めやう

第一番	三條御宿 本膳三ツ鉢
第二番	知恩院傘 三ツ鉢傘
第三番	嵐山 桜すし
第四番	二軒茶家 取合三ツ鉢
第五番	金閣寺 三階御肴
第六番	祇園祭 よい山提灯
第七番	御所 所うこんのぼ
第八番	高臺寺 御萩 干菓子
第九番	八瀬ノ里 打番玉子
第十番	南禅寺 瓢亭 湯豆腐
第十一番	鴨物せしご汁
第十二番	丸山 雪見 御肴

右登人前 價 貳拾 錢

居ながら名所をしるとか、歌人にあらねど料理人は居ながら知らず都名所、古跡名物に應じたを御笑ひぐさにて御来車をねがふ

南地みぞの御南ノ辻

元月ノ家あど 明月樓

からず。殊に払曉より焚く風呂の、煙りは七時の汽車に遅れず、何時ご来臨に相成とも、湯殿は日日に新たに沸し、酒肴を撰み、陶器を清し、精精勉強致しますれば、初鴉の早旦より瓦斯灯す夕辺まで、電線の引も断らぬ御来車を頼みます頼みますと、人力車に乘地となり、主人に代りて港内中を触る者は例の仮名垣魯文なり。一月一日より開店 姿見町一丁目 喜本」

自分が主宰する「仮名読新聞」に掲載した。がめつ

い彼の原稿料は1枚2円。1枚の文字数は不明だけど、そのころ、巡査の初任給は4円であった。

(美術エッセイスト、茅ヶ

「第一番 三條御宿 本膳三ツ鉢 御酒壺 鉢子」

「第二番 知恩院傘 三ツ鉢傘 壺本」

「第三番 嵐山 桜すし 取合 せ三ツ鉢」

第四番は二軒茶家、第五番は金

旗の標柱、礎え長き御影を蒙り、

新規に開く割烹店は、手狭ながら

も一個の地球」「値価は決して高

月・朝日新聞掲載

廣告・1884年(明治17)年3